

謹賀新年

皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

令和五年 元旦

阿部敏雄(敏翁)

以下の話題二つで新年の御挨拶に代えさせて頂きたいと思います。

1. 死生学、超心理学

一昨年来検討して来た、「死生学とスピリチュアリティ」(本ホームページ .4.) を「超心理学」という観点で纏めました。

その詳細は本ホームページの 2. 「超心理学」に有りますが、長文且つ難解です。ここでは、その概要を少し乱暴に簡略化して纏めてみました。

1.1 超心理学とは

超心理学とは、これまで知られている科学法則では説明のつかない、人間や動物が関係する現象の研究を行なう科学の一分野です。

それは、超感覚的知覚(ESP) 即ちテレパシー、透視、予知、念力(PK)<即ちこれまで知られている物理的力を用いる事なく、物体や物事の経過を変化させる心の力の事>、臨死体験や生まれ変わりなどが含まれます。

この超心理学を理解する為に参考にした書籍の大半をご覧にいます。



上記画像は、左から

1. 笠原敏雄 『超心理学読本』 2000年 講談社文庫
2. 石川幹人 『超心理学 封印された超常現象の科学』 2012年 紀伊国屋書店
3. ディーン・ラディン著 竹内薫監修 石川幹人訳
『量子の宇宙でからみあう心たち 超能力研究最前線』 2007年 徳間書店
4. マイケル・タルボット著 川瀬 勝訳 『投影された宇宙 ホログラフィック・ユニバースへの招待』 新装版 2005年 春秋社
5. 山田剛史・井上俊哉編 『メタ分析入門 心理・教育研究の系統的レビューのために』 2012 東京大学出版会
(以下省略)

この1～4の4冊を重点とし、次の5～7の3冊を加えて纏めました。
超心理学は、偶発的 ESP 現象、即ち テレパシー、透視、予知の研究から始まったのだが、それに対する批判が多く、ESP の実験的研究が始まる事になる。
そして多くの批判に耐えうる厳密な ESP の実験が J・B・ラインによって始められた。(1920年代)

1.2 実験的研究事例

表14-1：
本書の実験報告のメタ=メタ分析。超心理があるとするのがもっとも妥当な解釈である。

実験の種類	研究の数	試行数	偶然比 (分の 1)
夢見実験	47	1270回	2.2×10^{10}
ガンツフェルト実験	88	3145回	3.0×10^{19}
視線感知実験	65	34097回	8.5×10^{46}
遠隔意図検出実験	40	1055回	1000
遠隔凝視実験	15	379回	100
サイコロ念力	169	260万個	2.6×10^{76}
乱数発生器念力	595	11億ビット	3052
総計	1019		1.3×10^{104}

この表は、書籍 3.でラディンが「夢見実験」を含む ESP 実験 をメタ分析を用いて纏めたものである。

メタ分析とは、同一のテーマについて行われた複数の研究結果を統計的な方法を用いて統合すること、即ち統計的なレビューのことである。

上表のタイトルに「メタ＝メタ分析」とあるが、これはメタ分析した複数の結果を更にメタ分析する事を意味する。上表の各行はそれぞれメタ分析を示している。例えば一番上の行は、47の「夢見実験」をメタ分析して偶然比が 2.2×10^{18} 分の1である事を示している。

そして、上表の7つの実験のメタ分析結果を更にメタ分析すると偶然比が 1.2×10^{104} 分の1となる。

即ち言い換えれば、ESPが存在するとした場合、間違える危険性は、10の104乗分の1以下である事を示しているのである。

次にもう一つ念力(PK)に関する興味深い実験例を紹介したい。

それは、念力が乱数発生器の結果に影響を及ぼすという実験の一つである。

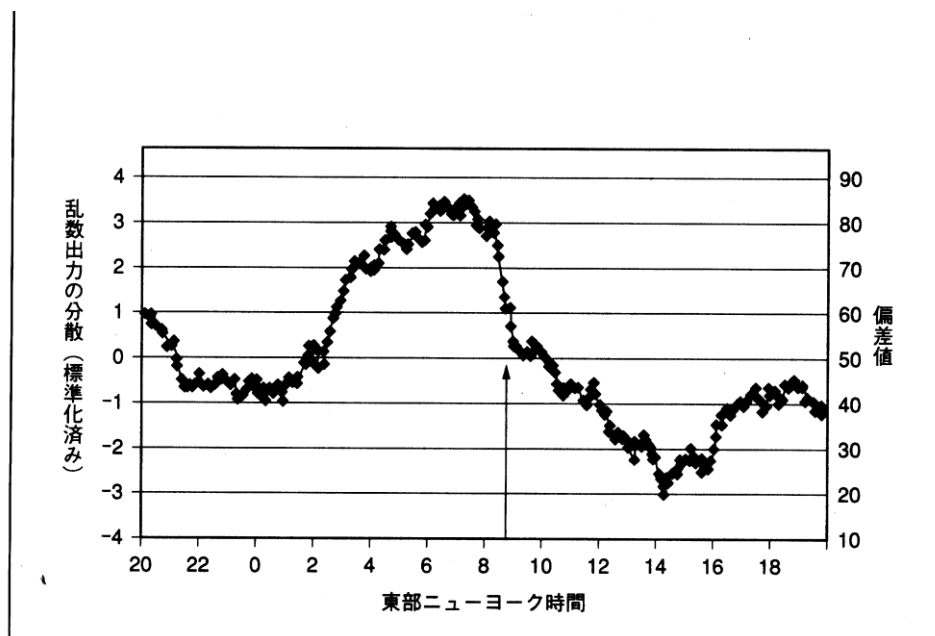
これも詳細はホームページ2.に譲るが、大衆の心の動きが乱数発生器に影響を及ぼす事を、ラディンの仲間がダイアナ妃の不慮の死(1997年8月31日)などから見つけた事から、種々研究開発の後、ロジャー・ネルソンによって地球意識プロジェクト(GCP)と名付けられた実験がスタートしたのである。

これは広範に注目を集める大事件によって生じる、地球規模の心の同調を推測しようという試みである。

この活動は、徐々に拡大し、2005年には65台の乱数発生器が全世界で稼働するに至った。

GCP発足以来最も劇的なイベントは、2001年9月11日のテロだろう。

その結果の表現の一つをご覧に入れる。



本図も3.から採ったものだが、GCPの「ベルの鳴動」の9月10日夜から11日夜までの拡大図。矢印は世界貿易センタービルに最初のジェット機が突入した時刻。

2001年でこれほど振幅の大きい日は他にはないという。尚この図でテロの前にピークがある理由の解明は容易ではないが、大地震の前にも現れると言う。

1.3 理論構築の試み

以上述べてきた超常現象は、所謂ニュートン物理学をベースとする自然観では説明が出来ない。

それで、新しい考えが数多く提案されている。

3.にはそれらについての紹介があるが、現在有力と思われるのは、量子論を中心とするもの、更にそれにホログラフィの概念を加えたものと思われる。

しかし、残念ながら現在定説となったものは見あらない。

新しい超天才の出現を期待したい。

1.4 終わりに

以上紹介を簡略化し過ぎてしまった点もあるので、分かり難い点があったと思うが、若し関心興味を持たれたならば、本ホームページ 2. 超心理学 をご覧頂きたい。

私は、このシリーズを纏め終えて私の死生観を覆っていた霧の様なものが多少とも薄らいで来た様に感じている。

2. 病院通い

省みると今年の特筆すべき第一は、病院通いの多さだった。

計 24 回だが、ピークは二つあって 2~4 月のコロナ感染、大腸手術をメインとする 9 回、

と 11~12 月のぎっくり腰、右足の複数疾患をメインとする 13 回だ。

第一のピークからコロナ感染に特化して話す事にしたい。

2.1 コロナ感染

2月3日頃 咳が出だし、咽喉が痛くなる。風邪かと思う。

6日 熱が出だす。長女が抗原検査キットを見付けてきてくれた。

7日 明け方、37.7℃に至り、キットで測定した所陽性を確認。

8日 汐田総合病院の発熱外来にて「重点観察対象者」と認定される。

「自宅・宿泊療養のしおり」39頁を貰って帰宅。

しおりに随って「神奈川県療養サポート」へ登録

9日 保健所により14日まで「自宅療養」が決定される。

毎日一回、AIによる自動音声電話にて体調報告

パルスオキシメーターの貸与(無料)、配食サービス(無料) 依頼

12日 配食サービス 到着

13日 パルスオキシメーター 到着

14日 「療養サポート」より 「自宅療養」が本日にて終了と認定

配食サービス、下図はしおりから撮ったものだが、実物も殆ど同じ。



2.2 ぎっくり腰と右足の複数疾患

1. 数年前から足背の腫れが気になっていたが、秋口から特に右足の状態がひどくなり、気にしていた。
2. これとは直接関係無いと思われるが、11月初めにぎっくり腰が再発。これが従来に無い痛みになり、耐えられず汐田総合病院整形外科にかかる。(11月12日)
3. 汐田ではX線検査で単なるぎっくり腰と分かり、痛み止め薬と湿布を処方してもらう。
尚、現在はほぼ完全に回復している。
4. ついでに、右足背の腫れについて相談したが、もっとひどくなったら内科に見て貰う事を勧められる。
5. その腫れが段々ひどくなり、ぶつぶつが出てその痛みがひどいので、汐田の内科にかかる。(12月6日)
この女医は、今までこの問題で相談した何人かの医師より熱心に取り組んでくれた様に思う。8日に各種精密検査の予約を設定後、皮膚科に回して貰い、そこで塗薬を処方してもらう。
6. 8日は、採血、採尿、腹部超音波検査の外、今までやった事の無い検査を数種実施。その中には、血管超音波検査(血管内血栓のチェック)、左右手首、足首血圧等同時測定(血管の詰まりを見る)、腹部造影CT(膵臓、肝臓、腎臓、脾臓及びその周辺の異常を検知)があった。
しかし、若干疑わしい点はあるが、問題の決定的原因は確定できなかった。

年明けに更に検査を続ける予定だ。

7. しかし、右足の踝の辺りに潰瘍が発生、そこから感染があったらしく、足先から下腿の半分くらい真っ赤に腫れ上がった。ぎっくり腰の痛みもまだあり歩行困難な状態になった。
8. 13日に内科で見てもらい、抗生剤と痛み止めを処方してもらう。また皮膚科で潰瘍部に塗る軟膏を処方してもらう。
9. 抗生剤、痛み止め、軟膏による治療は現在まで続いていて、右足の腫れは少しずつ収まってきてはいるが、まだ潰瘍は消えていないし痛みもある。

と言うような状態なので気の晴れない正月を迎えた。

今年は、もう少し健やかにのんびりと過ごしたいものと願ってはいるのだが。

最後は暗い話になってしまったが、皆さんには明るい希望に満ちた新年が訪れる事を祈念して今年のウェッブ年賀状を終わります。